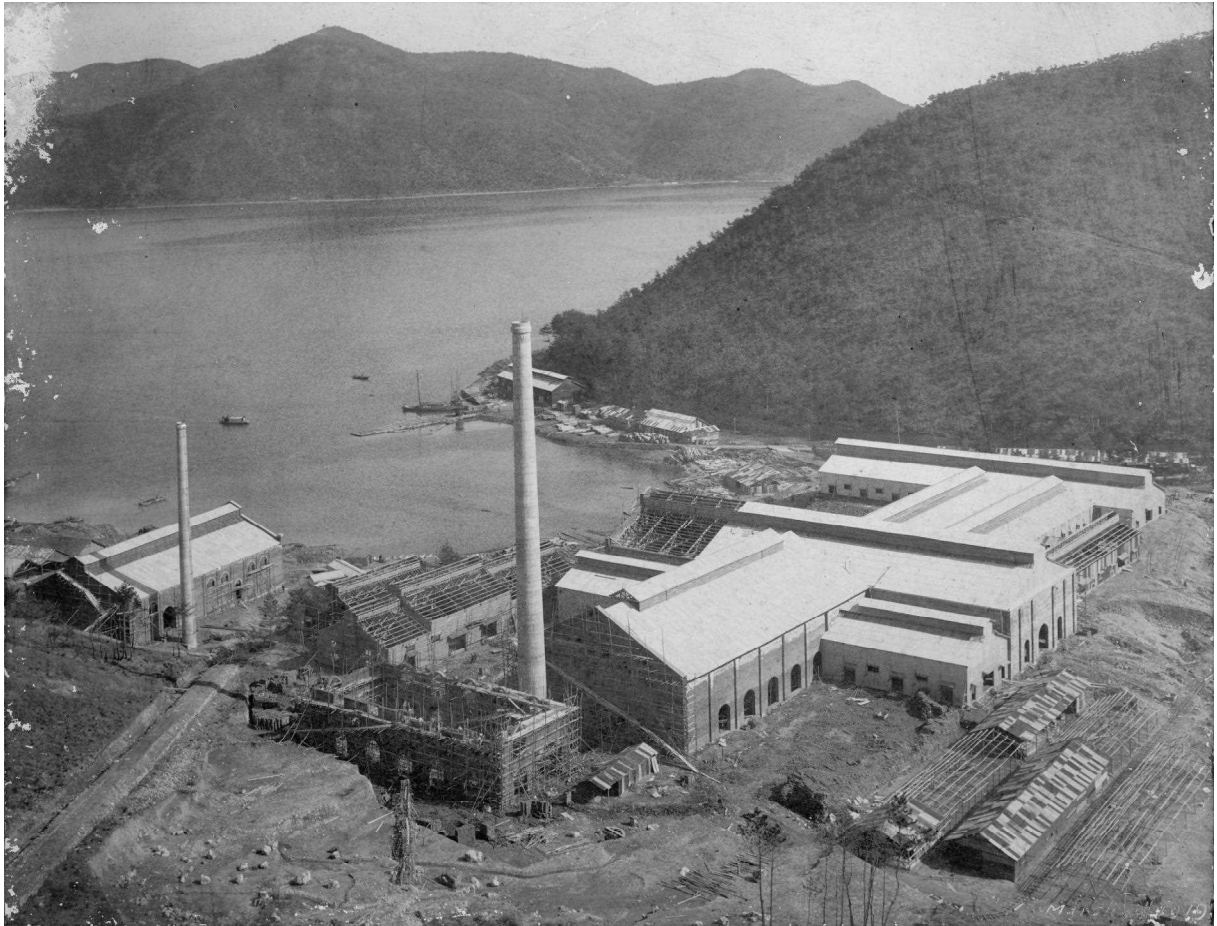


忘れられた大工場 極東硝子工業日の浦工場



建設中の極東硝子日の浦工場

先日、相生市立歴史民俗資料館は、市民の方から一枚の古い写真を提供していただきました。写真には1919(T08)年3月14日の日付が入っています。一目で極東硝子日の浦工場の写真であることはわかりましたが、この工場に関して詳しいことは判明していませんでした。そこで、この写真を元に調査できた範囲をまとめてみました。



操業中の日の浦工場

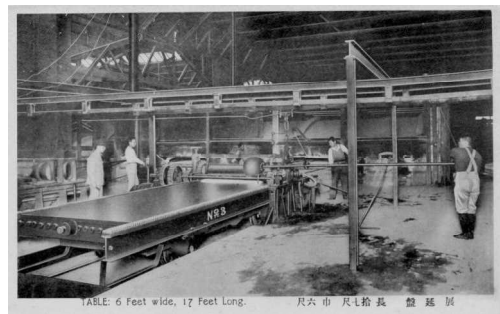
20世紀に入りアメリカで高層ビルが建築されるようになると、板ガラスの消費が急増しました。日本でも板ガラスの輸入が増え、国産化をめざす動きが始まります。

1902(M35)年、島田孫市が板ガラスを試作、1909(M42)年、旭硝子尼崎工場がベルギーから導入した手吹円筒法で板ガラスの製造に成功しました。

1914(T03)年、尼崎にユニオン硝子が設立され、1916(T05)年、大阪に大正硝子が設立されます。そして、同年7月に両者が合併して極東硝子になります。1918(T07)年5月20日、極東硝子を前身とする資本金500万円の極東硝子工業株式会社の創立総会が開かれました。同じ頃、資本金300万円の日米板硝子株式会社（日本板硝子の前身）が大阪に設立されています。

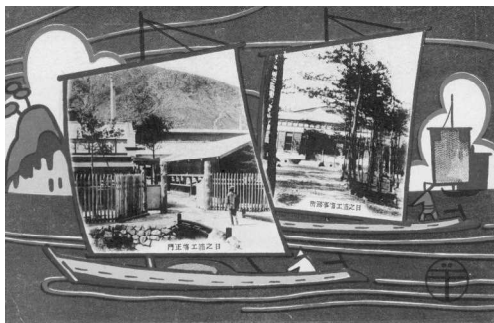
外務省外交資料館の資料によると、1918(T07)年4月、三井物産がアメリカから硝子製造設備を輸入しようとした記録があります。「極東硝子株式会社より別紙写の通り、出願これ有り候ところ、右は同社が本邦に於いて磨硝子および各種の型硝子を製造するため必要のものと認められ候(原漢文)」「数量 緩冷機二組・延盤一式・瓦斯発生機一式・溶解炉用耐火煉瓦一式・起重機一式等」

この製造設備が翌年に建設された日の浦工場に設置されたのではないかと推定されます。製造技術は、1914(T03)年に日本に導入された機械吹き円筒法によるものと思われます。円筒法は、①溶かしたガラスで円筒を作る ②円筒を切り開く ③加熱して平らな板にする という基本工程をたどります。



極東硝子絵葉書 展延盤

この工程は面倒な作業を含んでいたため、硝子の溶解槽から板状のガラスを引き上げる垂直引き上げ法が開発され、日本では、1928(S03)年に旭硝子が採用しています。



正門と工事事務所

1919(T08)年11月、極東硝子日の浦工場は型板ガラスの製造を開始しますが、1921(T10)年、ベルギーからの安値輸入で板ガラスが暴落し、1922(T11)年、極東硝子は操業を休止します。その後、1923(T12)年の関東大震災で板ガラスが急騰、1924年に一時操業を再開しましたが半年で操業を停止しました。

極東硝子工業株式会社は昭和初期の金融恐慌で倒産し、東京興行銀行の支配下に入りました。1932(S07)年7月の相生時報は「相生町二位の大会社、極東硝子工業会社姿を壊して野原となる」と伝えています。跡地は空き地となっていました。戦時中に播磨造船所の造機工場が建設され、戦後は、ディーゼルエンジンなど船舶用機器の生産拠点として現在に至っています。

参考資料 神戸大学附属図書館新聞記事文庫 国民新聞1918. 5. 14

日本板硝子株式会社五十年史

三井物産会社ノ「ブックペーパー、マシン」ノ輸入方ニ関スル件 大正7年4月

相生時報第一号1932. 07. 12